

【発問】 第38回

発問について、大西忠治は、教師の言葉かけ（指導言）全体の中で考察した。指導言を「説明」「発問」「指示」の3つでとらえ、それぞれが提言と助言の2つの機能をもつとした（文献①80頁）。自分の言葉かけがどういう機能を果たしているか教師が考えるのは授業構造を自覚する上でも有効である。

内藤圭太は、中学校社会科で単元ごとの発問を提案し、発問「少子高齢化は民主主義社会の課題か？」の提案では、『少子高齢化社会では、どのようなことが課題になっているのか？』という発問では、少子高齢化に関することに生徒の思考は限定されてしまいい、「社会全体のしくみを追究させ」られないいからとしている（文献③111頁）。おそらく、うまくかみ合わない発問をする「失敗」の中で、実際の生徒の思考展開の様子をつかんで、手応えのある発問を見つけてきたのだろう。「わかりにくい授業」（同、2頁）をめざす方向は、生徒主体の授業づくりへの

発展を期待したい。

大西も、自分の3人の子育てが、説明形、指示形、発問形であったことを通して、指導言は「生徒の違いが呼び出してくる形ではないか」と生徒主体の発問に自覚的で（文献②358頁）、「発問のない授業は可能か」という形で子どもの主体性をとらえようとしていた（文献①260頁）。

発問が、その学年（発達段階）ならではの発問になっているのか、その学年での子どもの主体のあり方にどう関係しているのか、を次に考えたいが、「教科内容の科学性の確立と教師の指導の性格の追求」が「子どもの発達とは何か」を解明する方向を意識したい（文献②120頁）。

（研究部・加藤聡一）

生活教育 eye

参考文献

- ①大西忠治「大西忠治『教育技術』著作集 第10巻 指導言（発問・助言・説明・指示）の理論」明治図書、1991年。
- ②同、『第11巻 指導言（発問・助言・説明・指示）の技術』。
- ③内藤圭太「単元を貫く『発問』でつくる 中学校社会科授業モデル30」明治図書、2015年。